

袋井市文化財調査報告書 第1集

袋井市雲座古墳D単位群発掘調査概報

1972

袋井市教育委員会編

序 文

袋井市豊沢及び高尾地区の一部を区域とする団体営畑地総合整備事業を実施することになり、昭和45年12月に雲座土地改良区が発足した。しかし、この事業を行なう区域の田畑山林のうち、台地上に埋蔵文化財（円墳4基）の存在することが事前の調査により判明していたので、当該土地改良区の事業担当者と打合せをし、工事の開始予定より約1月前から発掘調査を行なうこととし、大谷純仁氏に調査担当を依頼して調査を行なった。

調査期間は短かったが、大学の考古学専攻の学生及び袋井商業高等学校郷土史クラブ考古班の生徒のみなさんと、当該土地改良区の組合員の方々などの絶大な協力によって調査を完了し、学術的にも多大な成果を収めることができた。

その遺物は、袋井市立図書館に陳列し、郷土の考古資料として永く保管することになったので、今回その成果を印刷し、広く関係方面にご報告申し上げる次第であります。本書が、学術研究、教育の資料として活用されれば幸と存じます。

終りに、この調査に多大の労をわずらわした調査員諸氏、並びにご指導ご協力くださった関係各位に対し、厚くお礼を申し上げる次第である。

昭和47年 月

袋井市教育委員会

教育長 浅 井 喜 作

例 言

1. 本書は、昭和45年9月に発見された袋井市雲座雲座占墳D単位群の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は、袋井市教育委員会の主催で、遠江考古学会の大谷純仁氏が調査担当者となり、袋井市立図書館の川井正一がこれを補佐した。
3. 原図の作成は調査参加者全員によってなされ、遺物の実測・トレースについては川井がたった。
4. 本書の執筆は川井があたり、その文責を負うものである。
5. 本書中の各墳墳丘図等高線及び各断面図のレベルは、3号墳墳頂（標高35m 80cm）を0mとしている。
6. 各墳主体部図面の土層番号は、挿図第13図（折り込み）の土層番号と同一である。

雲座古墳D単位群 目 次

位置及び地形	1
調査の経過	2
1 号 墳	4
2 号 墳	7
3 号 墳	9
4 号 墳	12
雲座古墳D単位群出土遺物	14
ま と め	19

挿図 目 次

第 1 図 古墳群附近地形図及び遺跡分布図	1
第 2 図 古墳群地形図	2
第 3 図 1 号墳主体部、構造図	5
第 4 図 2 号墳主体部、構造図	8
第 5 図 3 号墳主体部、構造図	10
第 6 図 4 号墳主体部、構造図	13
第 7 図 鉄器類実測図	15
第 8 図 須恵器類実測図(その1)	17
第 9 図 須恵器類実測図(その2)	18
第 10 図 1 号墳 墳丘実測図	21
第 11 図 2 号墳 墳丘実測図	22
第 12 図 3 号墳 墳丘実測図	23
第 13 図 4 号墳 墳丘実測図	24
第 14 図 各 墳 断面実測図	25

図版 目 次

図版第 I	雲座古墳D 単位群の調査	27
	A) 遠 影	
	B) 古墳群の影観 (ボール左から 2. 4. 3 号墳)	
図版第 II	雲座古墳D 単位群 1 号墳の調査 1.	28
	A) 主体部の構造	
	B) 主体部の構造	
図版第 III	雲座古墳D 単位群 1 号墳の調査 2.	29
	A) 鉄器 (刀子、鉄 鏃) 出土状態	
	B) 馬具出土状態	
図版第 IV	雲座古墳D 単位群 2 号墳の調査	30
	A) 周濠と主体部	
	B) 主体部の構造	
図版第 V	雲座古墳D 単位群 3 号墳の調査 1.	31
	A) 墳丘全景	
	B) 周濠 (ブリッジ状遺構)	
図版第 VI	雲座古墳D 単位群 3 号墳の調査 2.	32
	A) 墳丘と主体部	
	B) 鋤先出土状態	
図版第 VII	雲座古墳D 単位群 4 号墳調査	33
	A) 墳 丘	
	B) 主体部の構造	
図版第 VIII	出土の鉄製品	34
	A) 1 号墳出土鉄鏃及び刀子	
	B) 3 号墳出土鋤先	
図版第 IX	出土の鉄製品 (馬具類)	35
	A) 1 号墳出土轡	
	B) 1 号墳出土土金具	
図版第 X	出土の土器類	36

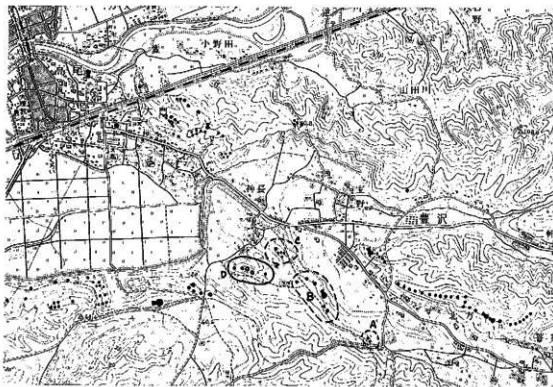
位置及び地形

雲座古墳D単位群は、袋井駅の南東方約1.5km、袋井市豊沢字雲座地内に所在する。

古墳群の位置を地形的に観ると、小笠山山塊の西山麓部にあたり、即ち、小笠沢川左岸の南東から北西方向に向けて、侵蝕谷をはさみ放射状に伸びる丘陵が、更に、小さな侵蝕により低く、短く指状に分岐した小笠山砂礫層を基盤とする一支丘上に存在する。

「静岡県遺跡地名表」(注-1)には未登録で、B・C単位群が神長古墳群として、前方後円墳一基を含む十基の古墳が登録されている。

D単位群は、前方後円墳と思われるもの一基と、円墳四基をもって構成されており、今回の調査の対象となったのは、円墳四基である。



第1図

古墳群位置図(1/25000)

調査の経過

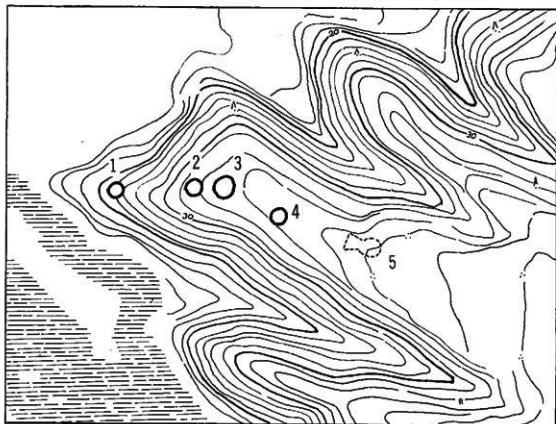
袋井市雲座地区畑地総合整備事業に伴い、工事区内に所在する五基の古墳が破壊の対象とされた。

工事関係諸機関と協議を重ねたが、現状保存を実現する有効な措置を見出すことができず、前方後円墳らしきもの一基を保存し、他は発掘調査後工事により破壊するという方針が決定され、昭和45年11月18日を期して調査に着手した。以下、簡単に調査の経過を述べてゆく。

調査は、地形測量及び各墳丘測量終了後、先ず、2・3号墳の墳頂部を通るトレンチを設定し発掘を開始した。作業の進展に伴い同トレンチにおいて、2・3号墳の内部主体の一部が発見され、夫々トレンチを拡張し遺構の全容を露呈さす。

次いで、4号墳の墳丘中央部を通り、東西に走るトレンチを設け発掘を進めたが、これ又内部主体の一部が確認され、拡張して全容をあらわにする。

2・3・4号墳の内部主体の位置が明らかになった段階で、夫々の墳丘及び周囲の調査に着手する。墳丘及び周囲の調査は、葦石を有する事が明らかにされた8号墳を主として、夫々二分の一ないし四分の一の範囲で墳丘構築面及び周を露呈させた。又、墳丘のプラン、盛り方等を確認する為に各墳丘共に十文



1:2,500

第2図 古墳群地形図

字にトレンチを設けた。

主体部内の調査は、墳丘調査の途中から併行して行ない、2・4・8号墳の順で次々終了した。

1号墳に関しては、人員的關係上他墳の主体部調査の終了間際になって開始し、墳丘中央部を通るトレンチを設け、主体部の位置を確認する。尚、内部主体内の調査に入る前に墳丘東側に存する周濠の調査を行なう。主体部は、他墳が素掘りの土壇であるのに対し、礫床を有していた為比較的口数を費し12月22日に終了する。

ここに40日に渡って行なわれた調査の全行程を完了する。

1号墳

1. 位置及び立地

1号墳は、袋井市豊沢字雲座1006-1番地内に所在し、その立地を縦ると南東から北西に走る丘陵の、丘陵上平坦面から比較的ゆるやかに沖積面に向かって降っていく丘陵先端の傾斜面に構築されている。

2. 外部構造

1. 墳丘

墳丘は、見かけのそれが13m位の径を計る円墳であり、調査開始前の伐採によるまでは山林であったため、保存状態は比較的良好と思われた。

調査の結果、北及び南側の墳丘は丘陵台体が砂礫層から構成されており、風雨等による侵蝕で丘陵そのものが流失していたため墳端を確認することができなかった。しかし、東方の2号墳につづく丘陵の稜線と、墳丘とは周濠によって分離され、且つ墳丘が区画されており、更に、西側も地山をカッティングする事により形成された墳端を確認することができ、それらをもとにして旧状を復元すると直径11.9mの円墳であったことが考えられる。墳丘の高さは、斜面に構築されているため西側を基準とすれば2.1m、東側では0.9mと異なっている。いずれにしても、封土の流失を考慮すれば現在より多少高かったものと思われる。

墳丘の築造に関しては、丘陵の主体をなす黄褐色砂礫層の上に、墳丘の周囲を整形した際の土と見られる砂礫含茶褐色土、茶褐色土等を盛り上げ封土としている。

尚、内部主体の北側に深さ約70cmのピット、東側にも浅いピット状遺構等、古墳築造以前の遺構が確認されたが、期日の関係等により部分的に掘り下げただけで、その時期及び性格等を明らかにする事ができなかった。遺物としては、前者から弥生式土器の小片が検出されている。

2. 周濠

墳丘の東側に存在する周濠は、幅1.5m、深さ0.65mで約7mに渡って円弧を描いて存在し、南北両側のクリーフで消失している。横断面は傾斜のゆるやかなU字形を呈し、周濠の両端は夫々両側に開きを見せている。この周濠は、南北両方向からの視覚に訴えるには比較的效果があったと思われる。

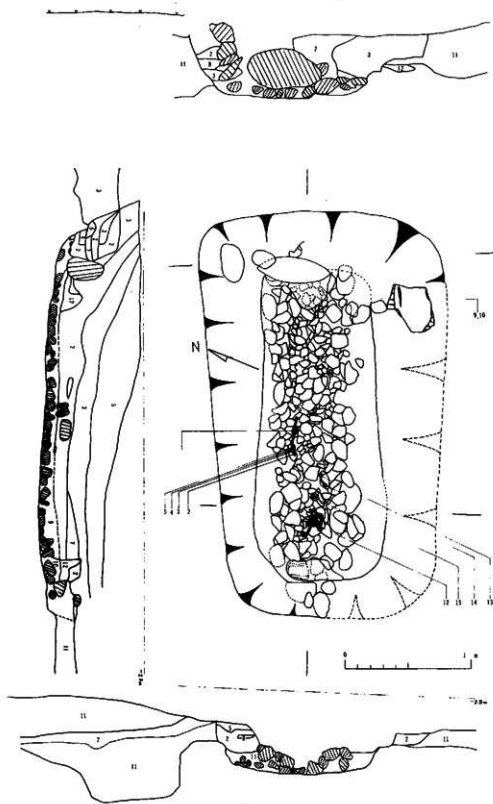
周濠内部からは、須恵器坏蓋、坏身片及び土師器片を夫々検出したが、須恵器は二型式にわかれる。いずれも墳丘より流れ落ちた状態で出土しており、層序的には扱えられなかったが、年代の差はあれ両者とも古墳に供献されたものと解釈したい。

3. 内部構造

当古墳の内部主体は、墳丘中央部より1.5m程東側に寄った現地表下0.9mのところに存在し、主軸をN-60°-E方向にとった土坑内に構築された礎床であった。

構造は、まず約2.5cm墳丘を盛った後、長軸3.2m、西部幅1.62m、中央部幅1.81m、東部幅1.96

第3圖 1号墳主体部



という西方が偏狭の土壇を、南側で幅約30cmの段を設け、東部で50cm、西部で80cmの深さで地山まで掘り込んでいる。尚、水平面を基準とすると、南部の方が深く、底面は西側に向かってやや傾斜している。

土壇底面とその周囲には、さしわたし10cm内外の円礫が一面に敷きつめられていた。その手法は底面に比較的扁平な石を不規則に並べ、周囲には前者よりやや大型の円礫を一部積み重ねる如くして構築していた。円礫群上面には、暗灰褐色有機土が8cm内外の厚みをもって堆積しており、木棺の使用が推定される。この礫床の東側は60×32×18cmの大型の礫によって、西端は25×16×10cmの円礫を半截したもので、それぞれ小口としている。礫床の主軸は、土壇と多少異なりN-65°-Eにおかれ、その内法は長軸24m、幅50~55cm、深さ18cmを計る。横断面は浅いU字形を呈しており、木棺の使用が考えられている事から、その形体は割竹形木棺と推定される。又、両小口石附近には青灰色粘土のブロックが見られるところから、これらの粘土によって木棺の両端が被覆固定されていたものと考えられる。

4. 副葬品

礫床内の副葬品はほぼ中央部の北側の側面寄りに、切先部は上部円礫の転落によるものから折れ東方を向いていたが、本来切先方を西方に向け、刃部を南方即ち礫床の内側に向けた刀子一口が検出された。この刀子の先端部、即ち西端より1mのところから鋸を東方に向けた鉄鍬四本が重なって検出された。又、西端より76cmの南側面寄りから二個、同様に65cmのところから一個の辻金具が次々検出された。更に西端より46cmのほぼ中央部にて簪一式が検出された。これらはいずれも礫面に密着する状態で検出されている。

礫床外からの副葬品としては、土壇南側のテラスの南東コーナー附近において、粘土ブロック上面より鉄鍬一本が鋸を東方に向けて出土している。

2号墳

1. 位置及び立地

本2号墳は、後井市豊沢字露座¹⁰⁰⁸⁻¹₁₀₀₆₋₄番地内に所在し、1号墳の東方約39mの、1号墳より約2m高い丘陵上の幅狭の平坦面に立地していた。かつては山林であったが昭和22年頃の開墾によりかなり削平され、調査前までは茶畑であった。

2. 外部構造

1. 墳丘

墳丘は前述の如く、開墾の際の削平によってかなりの変容をよぎなくされ、調査前は高さ50cm前後で16×11mの東西に主軸を有する楕円形を呈しておった。

調査の結果は、丘陵の後縁の走る東側及び西側には浅い周濠状の溝が囲り、墳麓が丘陵の傾斜面に近接している南及び北側では、地山を整形したテラスがめぐり、それぞれ墳丘を区画している事が明らかにになった。

以上の事実より2号墳を復元すると直径11.2mのはゞ正円形を描く円墳であることが判明した。従って、見かけの墳丘は、わずかながら東方に寄っていたことが明らかにになった。墳丘の高さは、わずかではあるが傾斜面に構築されていた為、東側墳端を基準とすれば60cm、西側では1mである。削平等を考慮すれば、往時は多少現在より高かったであろう。

封土は、灰褐色土の旧表土を基盤とし、周濠を掘った際の土と見られる茶褐色土や、地山の赤褐色土を盛り上げている。盛る順序としては墳丘中央部、即ち主体部附近を最初に盛り、その後周囲を盛っている。

2. 周濠

墳丘の周囲をめぐる浅い周濠状の掘り込みは地形の関係からか、墳丘の東側と西側にのみ存在し、その幅は東側において2.2～2.4m西側においては1mを計る。しかし、周濠外側においては旧表土が除去されており、外周縁は余り明瞭でない。深さは、旧表土を基準とすれば40～45cm、外周縁を基準とすれば10cm前後である。

2号墳と8号墳との間、約3mに渡っても旧表土は全く存在せず、地山直上に2号墳方から流れ込んだ地山と同質の赤褐色土が堆積しており、この赤褐色土が2号墳の周濠に堆積しているのに対し、8号墳の周濠は、この赤褐色土を切り込んで造られている。

3. 内部構造

本2号墳の内部主体は、墳丘中央部の現地表下20cmのところに、主軸をN-74.5°-E方にとった土塚であった。その構造は、旧表土を基盤とし、約20cm盛土したところから長軸2.85m、幅1.45mの規模を有して約0.48m掘り込まれたものであった。土壇の底面は赤褐色土である地山をもってし、更に中央部には木棺を安置する為の長軸2.85m、幅0.5mの浅いU字形を呈する掘り込みが存在した。U字

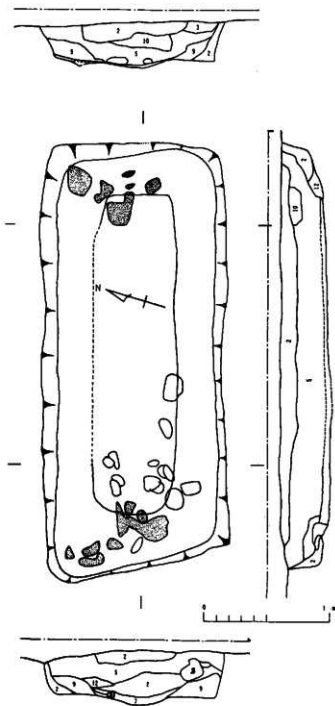
形の掘り込みの外側には、粘土混じりの暗褐色土が堆積しており、この暗褐色土は内側へ向って傾斜して、U字形の掘り込みの壁に続いてゆく。

土坑西半分の暗褐色土上面及び傾斜面には、中・小円礫が「コ」の字状に存在し、又、U字形掘り込みの東西両端には青灰色粘土のブロックが存在しており、共に木棺を固定するのに用いられたものと考えられる。更に粘土の一部は出土状態から木棺の両端を被覆していたものと思われる。

4. 副葬品

本主体部は、調査前の盗掘や攪乱等を受けていないにもかかわらず、遺構内部及び遺構附近からの副葬品は何ら検出されなかった。

第4図 2号墳主体部



3号墳

1. 位置及び立地

当古墳は、2号墳の東方約20mの豊沢字雲座¹⁰⁰¹⁻²₁₀₀₆₋₁₄番地内に所在し、2号墳より約85cm高い丘陵上の平坦面に位置し、墳丘の南側に広い平坦面をとり、丘陵のやゝ北側に寄って築造されていた。

2. 外部構造

1. 墳丘

見かけの墳丘は、高さ75cm、東西15m、南北18mというやゝ東西に長い楕円形を呈しており、開塹及び墓道の設置等による削平で、かなりの変容をよきなくされている事が予想された。

調査の結果、丘陵斜面に近接する墳丘北側は不明瞭であるが、浅い周溝状の溝を整然とめぐらせ区画しており、直径15.3mの正円形のプランを復元できる円墳であることが明らかになった。

封土は、墳丘周囲をめぐる周溝を掘った際の土とみられるものを、旧表土を基盤として盛り上げているが、概観するに、墳丘の外縁部を最初に盛り、墳丘中央部を後から盛っている事がわかる。

墳丘には、墳體及び周溝内に河原石が多数存在する事から、葺石が施されていたと思われるが、開塹により上部の葺石がかなり除去されている事、旧表土より上の旧墳丘面がほとんど存在しない事等により、原位置での葺石を確認できず、その形状及び規模等については明らかにすることができなかった。後述するブリッジ状の遺溝附近では、石の存在を見ず、葺石が施されていなかったと思われる。尚、石の大きさはあまり面的でない。

2. 周溝

3号墳の周囲にめぐらされた溝は、2号墳のものと同じように外周縁の余り明瞭でない周溝である。その幅を計ると4.5m～6.9mで、深さは墳丘の基盤たる旧表土上面を基準にすれば、75cm内外であるが、周溝の外側を基準にすると旧表土が除去されている為15～18cmである。

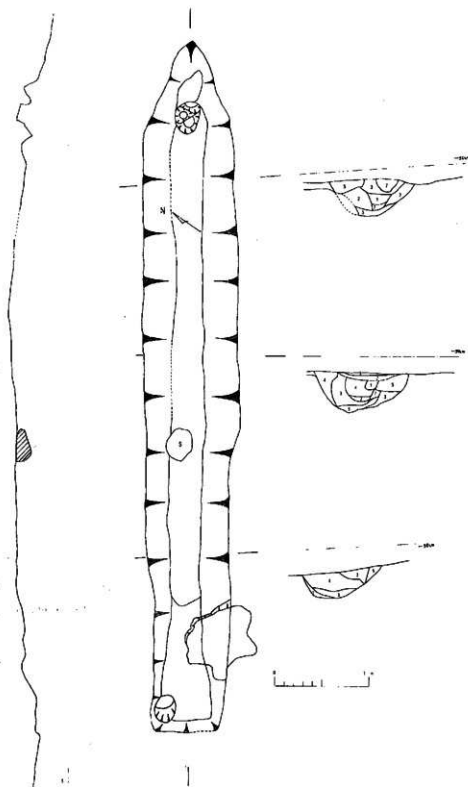
この周溝に注目すべきは、南西側の周溝約8mに渡って幅・深さともに他の部分より浅く狭くなり、あたかもブリッジ状を呈している事である。即ち、幅が2.3mと他の半分で、深さは水平を基とすれば他より約20cm浅くなっており、特別な意味を有するようである。その事を裏書きするように、当遺構の附近5×2mに渡って須恵器中形罐の破片が一個体分と土師器片が散布していた。須恵器は、故意に破壊されたと思われるもので、口縁部は下層から、胴部はそれより上層から検出された。更に当遺構の底面からは、刃先部を北方に向けた鉄製鋤先が一個体検出された。

以上の事と、墳丘南側に広く平坦面を残している事を考え合わせると、これが古墳の正面にあたり、何らかの墓前祭祀的なものが行なわれた事が推測される。

3. 内部構造

3号墳の内部主体は、墳丘中央部より西方に寄り、主軸をN-56°-E方向に有して存在し、その南西端は周溝までの距離がわずかに82cmである。

第5圖 3号墳立体部



構造は、現地表面下50～60cmの旧表土上面から掘り込まれた素掘りの土壇で、その規模は長軸7.81m、北東部幅0.96m、中央部幅1.0m、南西部幅0.74mと比較的大型のもので、横断面は南東側壁が北西側壁に比してゆるやかなU字形を呈し、船先を北東方に向けた完全なる舟型を呈している。

木棺の構造や規模は明らかにすることができなかったが、墓底底面上にレンズ状に堆積していた暗黄褐色有機土からその使用を考えられ、とすれば、横断面より割竹形木棺が想定される。

尚、墓底中央より60cm程南西端寄りの底面から85×27×16cmの河原石が検出された。又、墓底中央から2.6m南西端寄りの南東壁の内外より灰白色の粘土のかたまりが発見されたが、いずれも性格は明らかでない。

4. 副 葬 品

主体部及びその附近から副葬品は全く検出されなかった。土師器小片が数片墓底内上層より検出されたが、直接墓底に伴うものかは明らかでない。

4 号墳

1. 位置及び立地

4号墳は、四基のうちの東端、8号墳の東南方約28mのところ豊沢字雲座1002-2番地内に所在する。他墳同様調査前は茶畑であり、丘陵のほぼ中央の8号墳より一段高いところに築造されていた。

2. 外部構造

1. 墳丘

墳丘は、他墳と同様開墾及び地境の溝等によって削平され、かなりの変容を受けており、見かけは直径18m内外、高さ0.45m位の円墳状を呈していた。

調査の進展に伴い2・3号墳と同様に丘陵の稜線の走る方向、即ち、墳丘の東及び西側には浅い周堤状のものがめぐらされ、これに対し、南及び北側には地山を整形した平坦なテラス状の遺構が存在し、それぞれ墳丘を区画していたことが確認された。

以上の事実をもとに4号墳を復元すると、直径10.7mの正円形を描く円墳であることが明らかになった。

封土は、旧表土である灰褐色土の上部に墳丘の周囲を整形した際のもものと見られる赤褐色土を主にし、墳丘中央には灰褐色土等も含めて盛っている。盛り方の大きな順序を見ると、先ず、墳丘西部次いで内部主体の上部である墳丘中央部、更に墳丘東部という順で盛られていることがわかる。

2. 周堤

墳丘の東側と西側にのみ存在し、墳丘を区画する浅い周堤状のものは、2・3号墳と同様外周縁が不明瞭で、あえてその幅を計ると2.0mで、深さは外周縁を基とすれば10cm内外、旧表土上面を基とすると50cm内外である。

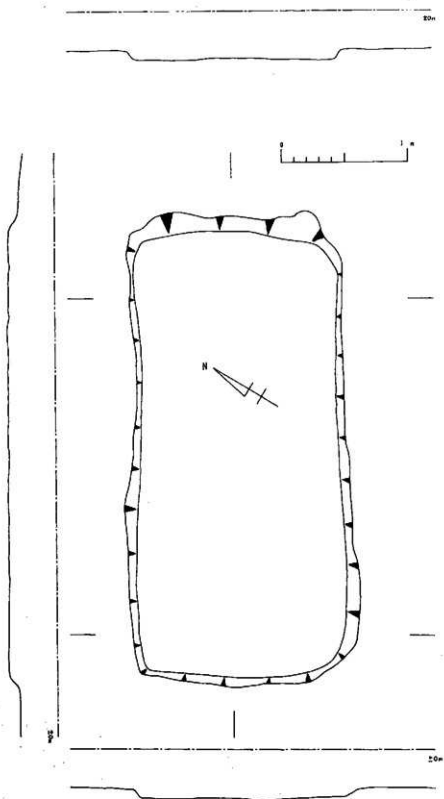
この東側の周堤内からは、須恵器中型甕一個体(9図-4) 蓋、(9図-3) 身二(9図-1, 2) 土師器片がいずれも墳丘方より流れ込んだ状態で、又、ほぼ周堤底面に密接して検出されている。これらの土器は、古墳築造直後に墳丘に破砕供献された土器と考えられ、8号墳の中型甕と同じ様な性格を有するものと考えられる。

尚、東側周堤の外側約2mのところに、幅65cm内外、深さ10cmの浅く細い溝状の遺構がほぼ南北方向に走っていることが認められた。この溝状遺構内には小枝の炭化したものが一面に散布しており、又、須恵器中型甕片が数片遺構内及び附近より検出された。当遺構の性格は明らかでないが、検出された中型甕片が4号墳周堤内より検出されたものと同一体のものであり、目下検討中である。

3. 内部構造

4号墳の内部主体は、墳丘中央部にN-57°-E方向の主軸を有して掘り込まれた土壇であった。この土壇の構造は、旧表土上面から長軸8.75m、幅1.7mの規模をもって掘り込まれ、四方の壁面には部分的に欠くところもあるが、灰褐色の粘土が7cm内外の厚みをもって施されていた。内部からは、木棺の使用を推定する様な施設や土層の発見もなく、又、副葬品も何ら検出する事ができなかった。

第6图 4号主体部



雲座古墳D単位群出土遺物

1. 鉄器類

a 1号墳出土刀子(第7図-110)

1は、刀子としては比較的大形であり、小刀の類に属するかとも思われる。切先先端部を欠損しており、現存長は25.1cm、把長7.9cm、刃幅(最大幅)2.8cm、棟厚0.6cm、把幅1.2~1.7cmで、両面造りで、ヤリ外反りを呈している。

10は、現存長5.4cmで、刃渡り3.6cm、刃幅0.5cm、棟厚0.15cmで、把部には木質が比較的に残存している。

b 1号墳出土鉄鉄

竊被平造脇扶柳葉式

二点出土しており、第7図-2は身幅の広い大型品で身幅8.2cm、茎部は一部欠損しており現存長8.8cmである。第7図-8は、現存するのは一部で、この型式に属するものと思われる。現存長3.5cm。

広楕平造柳葉式(第7図-4)

身幅3cm、全長8.9cmで、鍔の有無が明瞭でない。

両丸造脇被髷式

第7図-5は身幅0.9cm、全長9.2cmでほぼ完形品に近い。9は現在長7.1cm、身幅0.7cmで鍔被ぎは確認できない。他に茎部片(第7図-6、7、8)を出土しているが形式は明らかにできない。

2. 馬具類

a 轡(第7図-12)

鏡板、引手、轡及び轡から成っており全て鉄製である。鏡板は、下端に半円状に切り込みのある楕円形を呈しており、中央部に楕円形の穴があり、周囲には文様と思われる凹が認められる。引手は、鏡板の外側に取りつけられ、鏡板の中央を通り内外に通じている轡と環状金具で連結されており、引手金が別に取つけられている。轡は、横断面が方形で、一辺が0.85cmである。又、相方の長さが異なり一方は7.7cm、他方は9.4cmである。又、鏡板の上部には凸起がありそこから八連の兵庫鎖が取り付けられている。

b 辻金具(第7図-13、14、15)

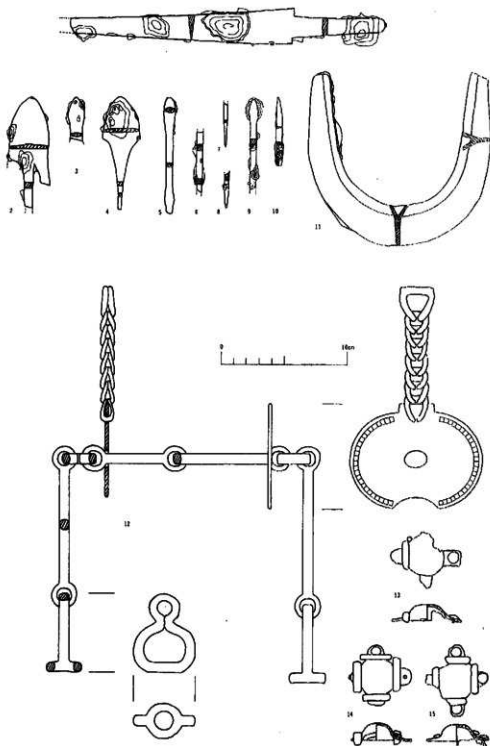
三個検出されており、造りは半円球状部の四方に脚をつけたものである。脚は円頭状のもので、主体部と接するところに一本の細い鉄帯を被せてあり、その先端は皮革を抱える如く内脚に向かって折れ曲っている。又、軀は頭部が半円球状で、四脚先端部寄りの中央部に存在し、その先端はほぼ直角に曲っている。

3. 農具

a 鉄製鋤先(第7図-11)

長さ13.7cm、刃幅14.4cmで刃先部はU字形を呈している。刃先部の幅は8.1cm、耳部端の幅は1.5cmで、都山比呂志氏の分類によるU字形クワ・スキのA類に属するものである。(注2) 柄を挿入する為のV字形の幅は1.2cm、奥行き0.7cmである。

第7圖 鉄器類実測図



4. 土 器 類

a 1号墳出土須恵器

坏 身

完形品はなく、いずれも破片があるが三個体分認められる。第8図-1は立ち上がりがやや内傾し、高さ1.9cmを計る。口唇部はやや外反し、内面に浅い沈線が施されている。第8図-3は立ち上がりがやや内傾し、受部からの高さは1.4cm前後である。底部は逆時計回りのヘラ削りが行なわれており成形及び調整ともに雑で焼成も不良。8図-4は立ち上がりが内傾し、受部からの高さは1.2cm前後である。口唇部には細く浅い沈線がめぐっている。調整、焼成共に良。

坏 蓋

8図-5は、天井部と口縁部とをわける稜線がわずかに突出しており、口縁部はわずかに外開きをみせ、口唇部内面は斜めにヘラ切りされている。

8図-6は、肩部の突出がほとんどみられず、口縁部はわずかに外反し、口唇部内面は斜めにヘラ切りされている。調整は雑で、焼成は不良。

尚、坏身とセットをなすと思われる8図-2は、肩部の稜が短く鋭さに欠けている。身と同様、成形及び調整は雑で焼成は不良。

b 3号墳出土須恵器

中 型 壺 (第8図-7)

表面は大むね灰褐色を呈し、口縁部から体部上半にかけて自然釉が見られる。内面は口縁部と底部が灰色を、他は黒色を呈している。口縁部は朝顔形に外反し、端部はやや丸味を帯びている。口縁部近くには断面三角形の凸帯をめぐらしている。器面は、ナデで入念に調整されている口頸部を除き、器表に平行叩き目文を残している。内面は、体部上半の肩部附近に薄く同心円文を残しているが、他は同心円文が消されている。

c 4号墳出土須恵器

坏 身 (第9図-12)

口径は1.2cm内外で、器高は4.5cmである。立ちあがりの端部は共に丸くおさめであるが①の受け部の端部はやや鋭い。底部ヘラ削りの方向は、共に逆時計回りで②の底部には部分的に緑色のふき出し釉が認められる。整形、調整及び焼成は共に比較的良好。

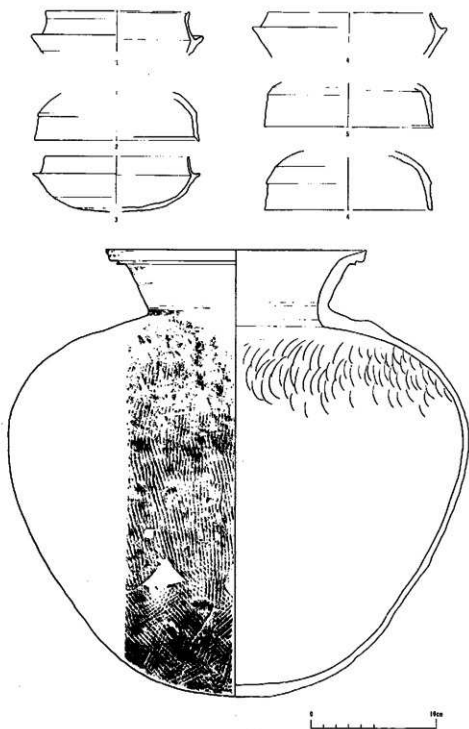
坏 蓋 (第9図-8)

口径1.85cm、器高4.6cmで天井部は扁平に近く、天井部と口縁部をわける稜はほとんど突出していない。天井部のヘラ削りは時計回りで二回にわたって行なわれている。尚、天井部には×印のヘラ配号が施されている。調整、焼成共に良好。

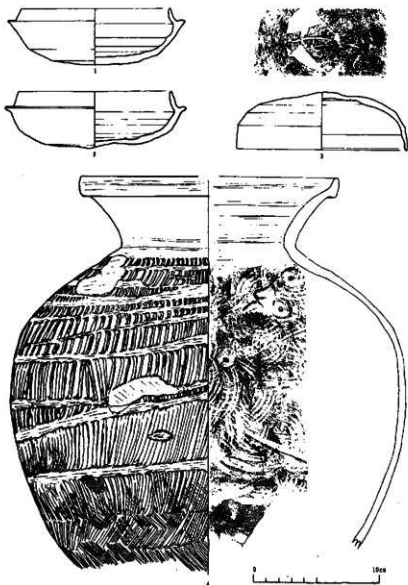
中 型 壺 (第9図-4)

口径2.04cmで、体部下半は欠損している。口縁部は朝顔形に外反し、口唇部近くになってやや直立し、端部は丸味を帯びている。器面は口頸部を除き、平行叩き目文を残し、その叩き目文の間を数条のすり消し痕が横走している。そのすり消しの方向は全く時計回りである。体部下半には叩き目が重複し格子目文になっているところがあり、方向を異えて意識的に整形したものと看取される。内面には、ほぼ全面に渡って同心円文が残されている。

第 8 图 1. 8 号土器



第9圖 須惠器類実測図



ま と め

雲座古墳D単位群1号から4号墳の調査結果を述べてきたが、それらを要約することでまとめにしたい。雲座古墳D単位群の所在する丘陵は、南東から北西流してくる小笠笠川が、その流れを更に西に曲折するところの南岸に位置している。

小笠笠川の流れる兩岸の丘陵には、山本山古墳群、駒ヶ谷古墳群、長者平古墳群、雲座古墳A、B、C単位群及び響ヶ谷古墳群等数多くの古墳群が認められ、その大部分は後期群集墳に属するものと推定される。

雲座古墳D単位群は、それらの古墳群の一つで、五基の古墳によって構成されていた。そのうちの四基が今回調査されたのである。

個々の古墳の土地をみると、284号墳が幅狭の丘陵上平相面に築造されているに対して、1号墳は、丘陵先端の斜面に営造され、しかも自然地形を利用していた。又、他墳が外周線の設定でない浅い周堀状のものがめぐらされているに対し、1号墳には丘陵の東部を切り離すかの如くに比較的深い周堀が存在した。

墳丘の構築に関しては、すでに述べてあるように各古墳によってそれぞれ異なっているが、3号墳が遠州地方に於いては古式古墳を余くと銅剣の多くない葺石施設を有していた点で注目されよう。(注8)

埋葬施設については、1号墳が遠州地方に於いては極めて希な鎌床を内部主体に有している事、それ以外は極めて一般的な素掘りの墓床である。

ところで、その構築上、特に掘り方の点で一定の盛り土をした後掘り込んだものと、旧表土上面から直接掘り込まれたものとの二がある。即ち、前者には12号墳、後者には84号墳がそれぞれ該当する。更に前者に共通する点として青灰色粘土の使用、掘り込みが二段になっている事、又、木棺の存在が積極的に考えられる等の点があげられ、埋葬施設の構築上、二つにグループングすることが可能と思われる。

副葬品については、1号墳から出土した鉄製鋤一式、辻金具、鉄鏡及び刀子が主で、他に3号墳周から鉄製鋤先を出土したのみで(注4)28号墳からの出土はみられず、全体に量的に乏しい。

それにしても、1号墳は多分に戦国的性格を示す副葬品を有しているが、他墳の副葬品の皆無に近い状態は、いかなる理由においてであろうか。

ちなみに、雲座古墳D単位群よりわずかに1.5Kmに所在する大門大塚古墳は、ほぼ同年代で横穴式石室が築かれ、豊富な副葬品を有しているのである。(注5)又、地蔵ヶ谷古墳群においても内部主体は当古墳群と類似しているが、武器、玉類等の副葬品を有している。(注6)

詳細は本報告に譲るが、五世紀代末葉から六世紀代前半にかけて共同体の変質、大和政権の半島での版図等、激化する内部矛盾により大和政権が支配体制の再編を行ない、それにより激化した共同体間の階層分化と無関係ではあるまい。

須恵器は、各古墳とも周堀内よりそれぞれ出土している。時期の判明するものとしては、1号墳の須恵器型式Ⅱ期とⅢ期に属する蓋杯、身杯が8号墳のⅡ期末ないしはⅢ期前葉にあたると思われる中瀬壺が、又、4号墳からもⅢ期中葉に属する蓋杯、身杯、中型杯がそれぞれ存在する。

以上の事実よりその構築年代を考えてみたい。

1号墳は、土地、内部構造及び副葬品等から中 antiqu 墳の様相もうかがわれるが、Ⅱ型式に相当する須恵器が検出されている事、鉄製馬具を有している事等から五世紀代末から六世紀代初頭の時期を与えたい。

8号墳は、Ⅱ型式末ないしはⅢ型式前葉に相当する須恵器杯と、U字型鉄製鋤先が年代推定の手掛りになるだろう。U字形鉄製鋤先が出現するのは、五世紀代中葉以後といわれ、更に五世紀代末から六世紀前

半にかけて普及する事が明らかになっている。須恵器杯の時期が六世紀初頃ないしは前葉である事と考え合わせると、8号墳の築造年代は1号墳に続く六世紀前葉頃と推定される。

4号墳については、第Ⅲ型式中葉に位置する須恵器を有している事から六世紀中葉の時期を与えたい。

ところで、2号墳は、副葬品をなんら有さず、年代推定の手掛りに欠けている。しかし、その内部主体の構造は前述のように1号墳のそれと同様であり、又、周埴部での土層断面で8号墳より古いものであることが確認されている事から、1号墳に近接する時期、それも8号墳の年代までは降らない時期を与えたい。

前述の如く、雲座古墳Ⅱ単位群は、五世紀末葉から六世紀代中葉にかけて形成された小笠沢川流域における後期群集墳の先駆的な古墳である事が明らかになった。

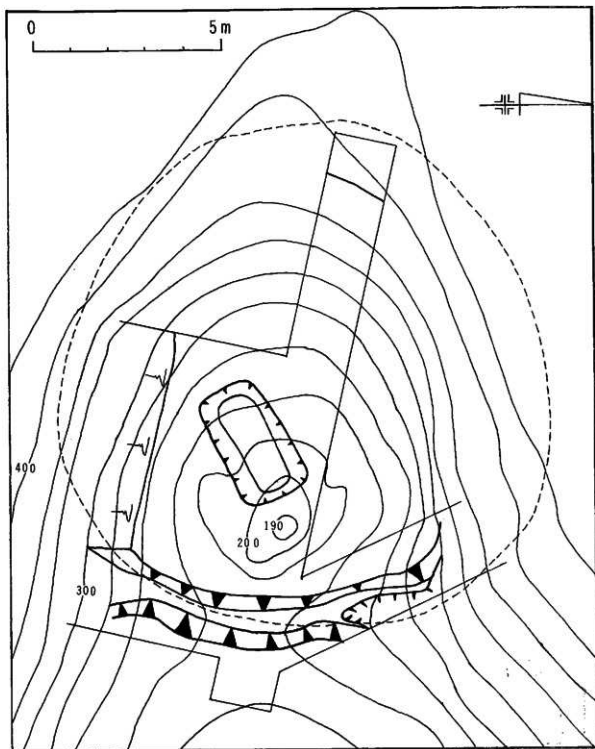
最後に、本調査にあたって袋井市経済課、雲座土地改良区の方々及び次の各氏の協力を得るところ極めて大なるものがあつた。末尾ながら各氏の名を列記して感謝の意を表わすものである。

佐藤正好	馬田弘裕	足立順司	柴田稔
林律子	黒沢涼子	平尾光枝	大草康弘

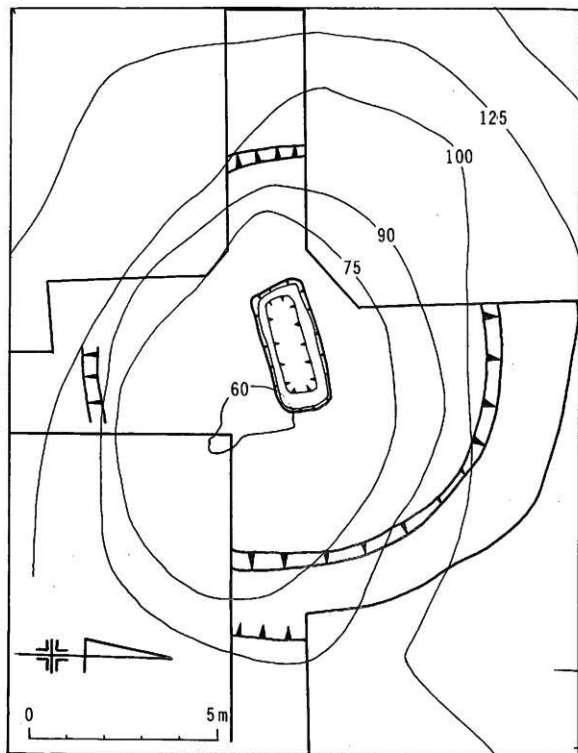
袋井商業高校社会科クラブ

- 注 1) 静岡県教育委員会『静岡県遺跡地名表』(1961)
- 2) 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」(『考古学研究』51)
- 3) 附近では、地蔵ケ谷8、4、5号墳等の例がある。
- 4) 遠州地方に於いて古墳からU字形鋤先を出土した例は有るが、周埴から出土した例はない。
鈴木久雄「磐田市勾坂新A5号墳発見の遺物」(『遠江考古学研究』1)
- 5) 『静岡県史』第一巻(1980)
- 6) 静岡県教育委員会「袋井市地蔵ケ谷古墳群及び横穴群発掘調査略報」(『静岡県文化財調査報告』第四集、1968)

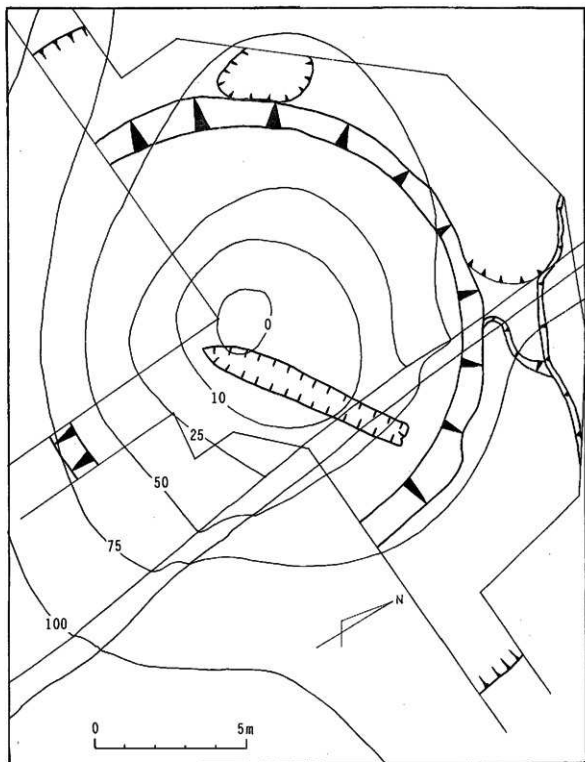
第 10 图 1 号墳墳丘図



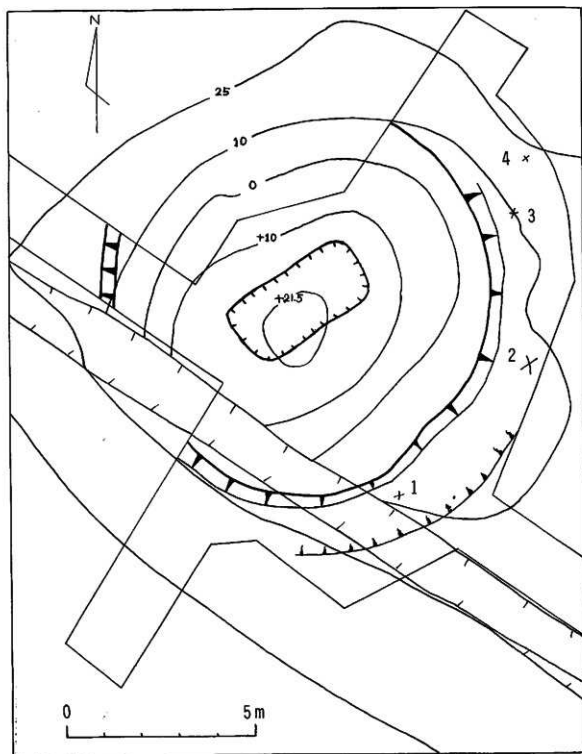
第 11 图 2 号墳墳丘岡



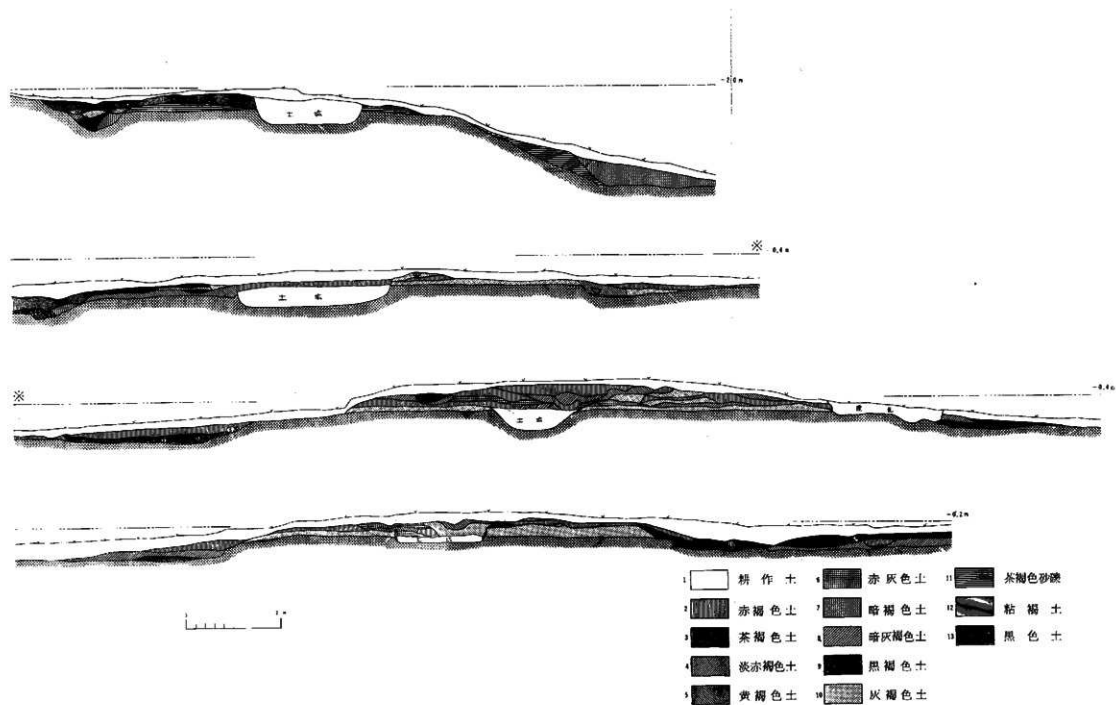
第 12 图 8 号墳墳丘圖



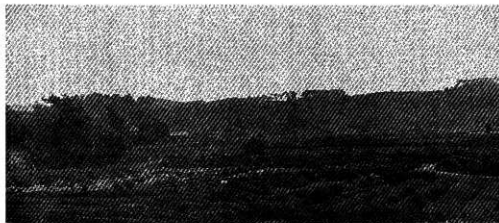
第 13 图 4 号墳墳丘圖



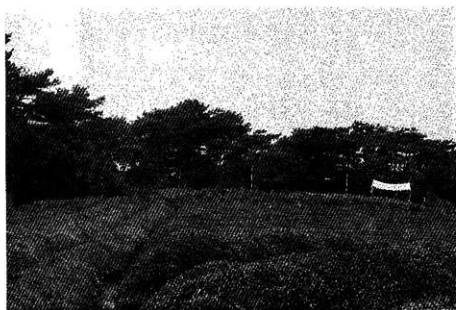
第14圖 各墳断面実測圖



図版第 I 雲座古墳 D 単位群の調査



A 雲座古墳 D 単位群遠影



B 調査前の 243 号墳（ポール左から）

図版第Ⅱ 雲座古墳D単位群1号墳の調査1.



A 主 体 部 (構造と遺物出土状態)



B 主 体 部 (東方より)

図版第Ⅱ 雪座古墳D単位群1号墳の調査2

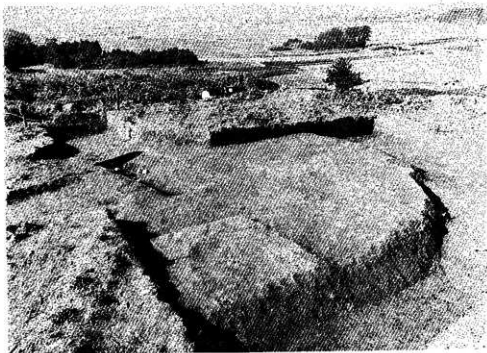


A 刀子及鉄鏃出土状態

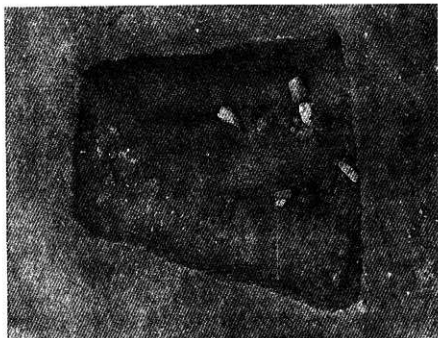


B 馬具出土状態

図版第Ⅳ 雲座古墳D単位群2号墳の調査



A 周堀と主体部

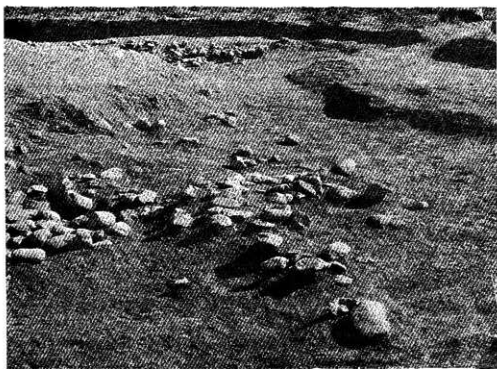


B 主体部の構造

図版第 V 雲座古墳 D 単位群 3 号墳の調査 1.

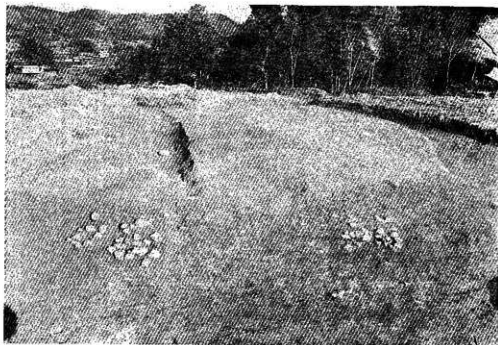


A 墳丘全影



B ブリッヂ状遺構

図版第Ⅵ 雲座古墳D単位群3号墳の調査2.

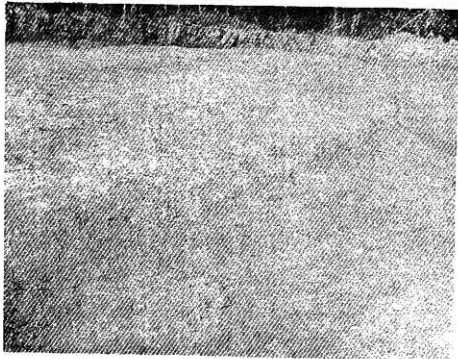


A 周堀と主体部

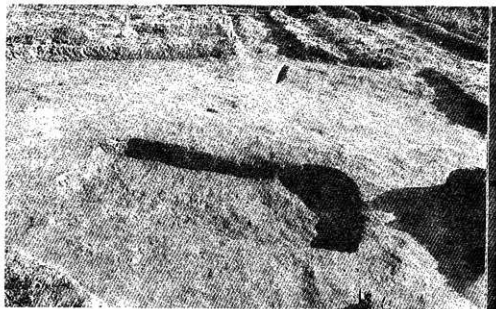


B 鉄製鋤先出土状態

図版第Ⅶ 雲座古墳D単位群4号墳の調査

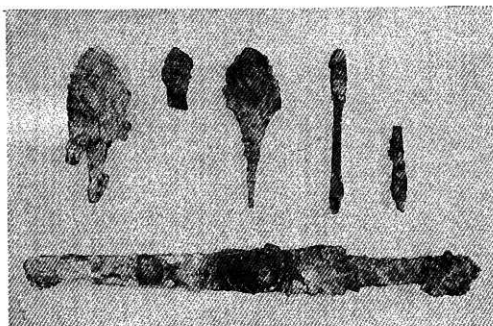


A 周 漕

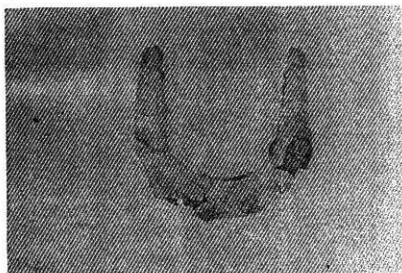


B 主 体 部

図版第Ⅷ 出土の鉄製品

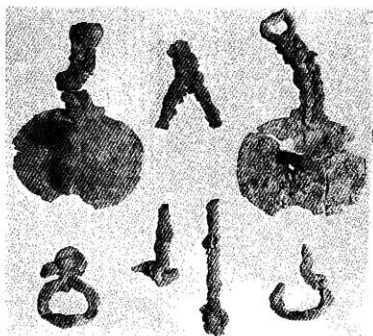


1号墳主体部出土 鉄製品

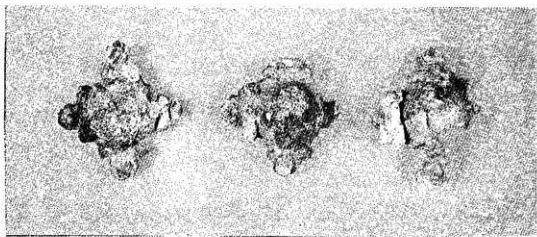


3号墳 周堀出土鍔先

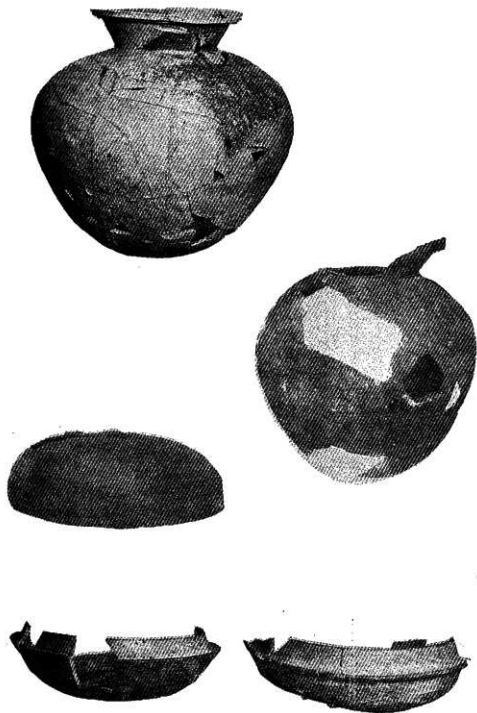
図版第Ⅱ 出土の鉄製品（馬具類）



A 1号墳出土物



B 1号墳出土金具



出土の土器類